

第54回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会 全国大会

第3分科会「吃音のある子供への指導および支援」

提案2 「吃音を主訴とする児童の見立てと指導について」
阿部幸先生 逆瀬川聡子先生 稲田由佳先生

講評の担当：筑波大学人間系 宮本昌子

smymt@human.tsukuba.ac.jp

令和7年7月30日（水）14時10分～14時50分

国立オリンピック記念青少年総合センター



令和4～6年度の都難言協課題別研究会（吃音）
において、先生方の活動に参加させていただき、
ありがとうございました。

- 事前に考えたこと
- 今日の発表をお聴きして考えたこと

について、講評として約40分間でお伝えしたいと思います。

「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について（文部科学省，2022）」によると，

（この調査で10.4%の児童に学習・行動面で著しい遅れがあると報告された）

（「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」）における【話す障害】には，以下の5項目が含まれる

- 適切な速さで話すことが難しい
（たどたどしく話す、とても早口である）
- ことばにつまったりする
- 単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をする
- 思いつくままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい
- 内容をわかりやすく伝えることが難しい

表1 ことばの教室で、吃音以外の神経発達障害が疑われる割合（関東地方の90名を対象とした結果）

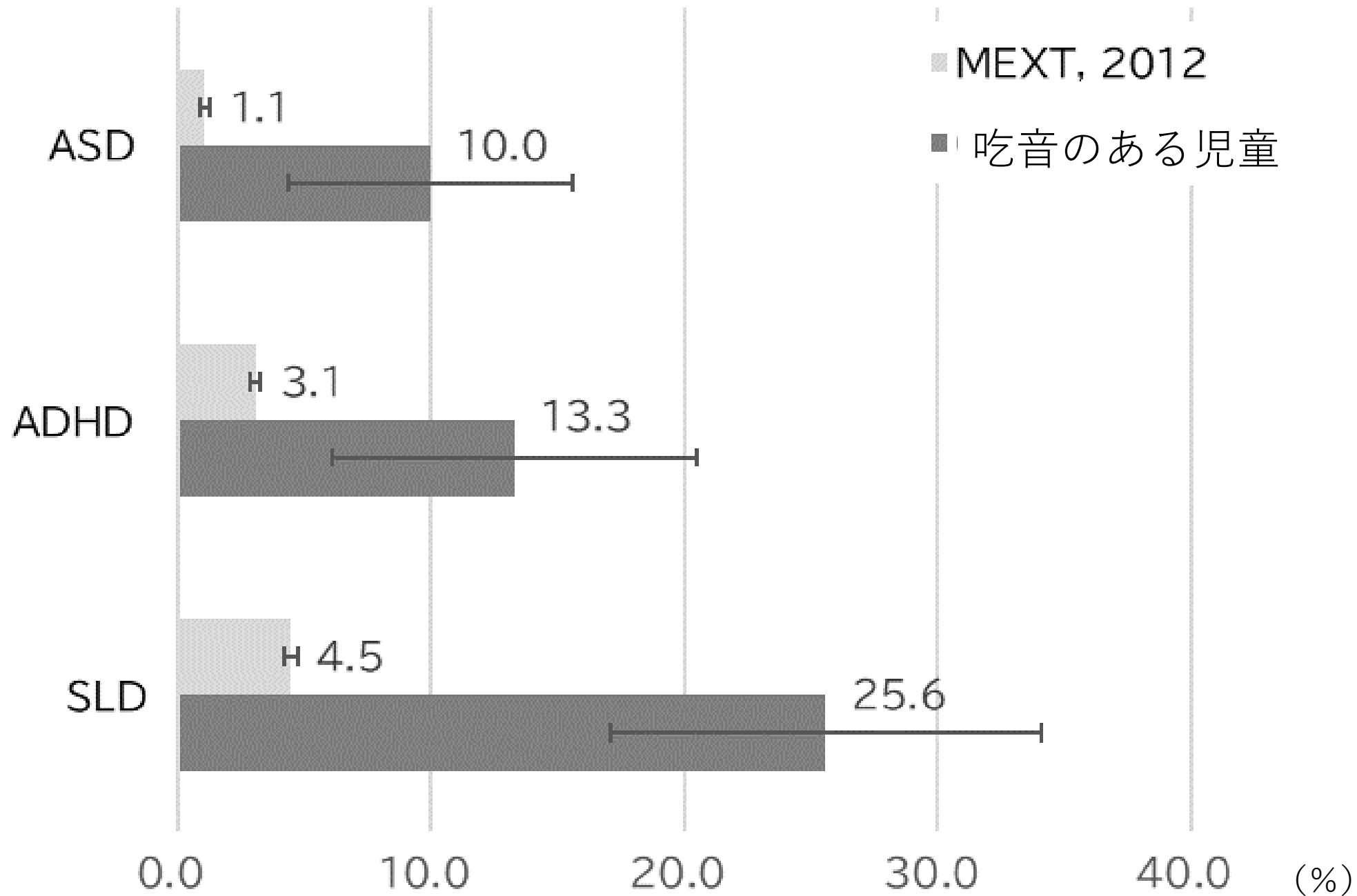
	人数	割合(%)
SLDのみ	14	15.6
ADHDのみ	5	5.6
ASDのみ	3	3.3
SLD + ADHD	4	4.4
ADHD + ASD	1	1.1
ASD + SLD	3	3.3
SLD + ADHD + ASD	2	2.2
合計	32	35.5

註) 小数点第一位以下を四捨五入したため、割合の合計が一致していない。

図1

文部科学省
(2012) と
吃音を対象とした
調査の比較

(Miyamoto et
al., 2021)



吃音のある児童に学習・行動面の遅れがみられる割合は、
通常学級を対象とした調査文部科学省（2023）
と比較すると、**約3倍**であることが推測される。

（きこえと）ことばの教室に訪れる、吃音を主訴とした児童の
約1/3に何らかの併存があると想定すると、「吃音」の評価だけ
では、不十分ではないか・・・？

事例の紹介

- インテーク：8歳6か月（小2の春休み）
- 主訴：ことばの発達の遅れ，発音がはっきりしない，文字の誤り
ことばがつまることもある
- 集団適応：通常学級で落ち着いている。離席はないが，ボーっとしていることはある。
- 友人との関係：自分から積極的には友達の中には入っていかない。誘われると喜ぶ。
- 性格：明るく，人のお世話が好き。
- 発音の誤り：/キュウショク/→/チュウショク/となる。/ki/⇔/tei/の誤りが気になる。
- 言語表出：質問に対し「知らない」「分からない」が多くあまり答えない。
話したとしても，一文が短い。

3年生のときの発話

まー，野球みたいだけどさ，えっと，一回でキャッチ，キャッチ，キャッチ
されたら，えーと，もう，ア，アウトでさー，えーと，バウンドしないで，キャッ
チされたらアウトで，あ，あとは，えっと……

⇒「ア、アウト」「キャッチ、キャッチ、キャッチ」「えーと」のような、
緊張性のない語頭の繰り返し、単語の繰り返しや、間投詞の挿入が目立つ
「キャッチ」の構音、構文、全体的に何が言いたいか、ということが伝わりにくい



4年生のときの発話

もちろん悔しかったけど、でもさー，嬉しい話だよ。昨日のおひ，お昼，昨日のさー，給食準備中にさあ，えーつとさ，集まってさー，スーパードッチでた人，それでさー，えつとさ，負けたチームのさー，先生からさー，表彰状を，えつと，なんだっけ，スーパーアイドル賞もらったの。



「けど」「表彰状」などの構音や
「おひ、お昼」「えつと」などの非流暢性は気になるが、
話としてはよく伝わっている

伝わりづらい話し方は 迷い発話（maze behavior）ともいわれる

- 音節、語の順序配列が乱れる
- 語想起が困難で、間が空いたり、不要な語句が表出される
- 文法の組み立てが難しい
- 話がまっすぐに進まず、行ったり来たりする
- 行き当たりばったりで、バラバラの話し方になってしまう

意図した内容の言語形式化が困難な状態

発達性吃音であるように思われた症状が、
「吃音の中核症状」ではない場合もある



緊張性や苦しさを伴わない連発などの症状が多くを占める児童を
純粋な「発達性吃音」と捉える前に、
広く実態を捉える必要があるのではないか



（発達性）「吃音」を主訴にインタビューしたとしても、児童の症状をとりまく発達の状況を把握し、その実態に即した指導方針を立てる必要がある

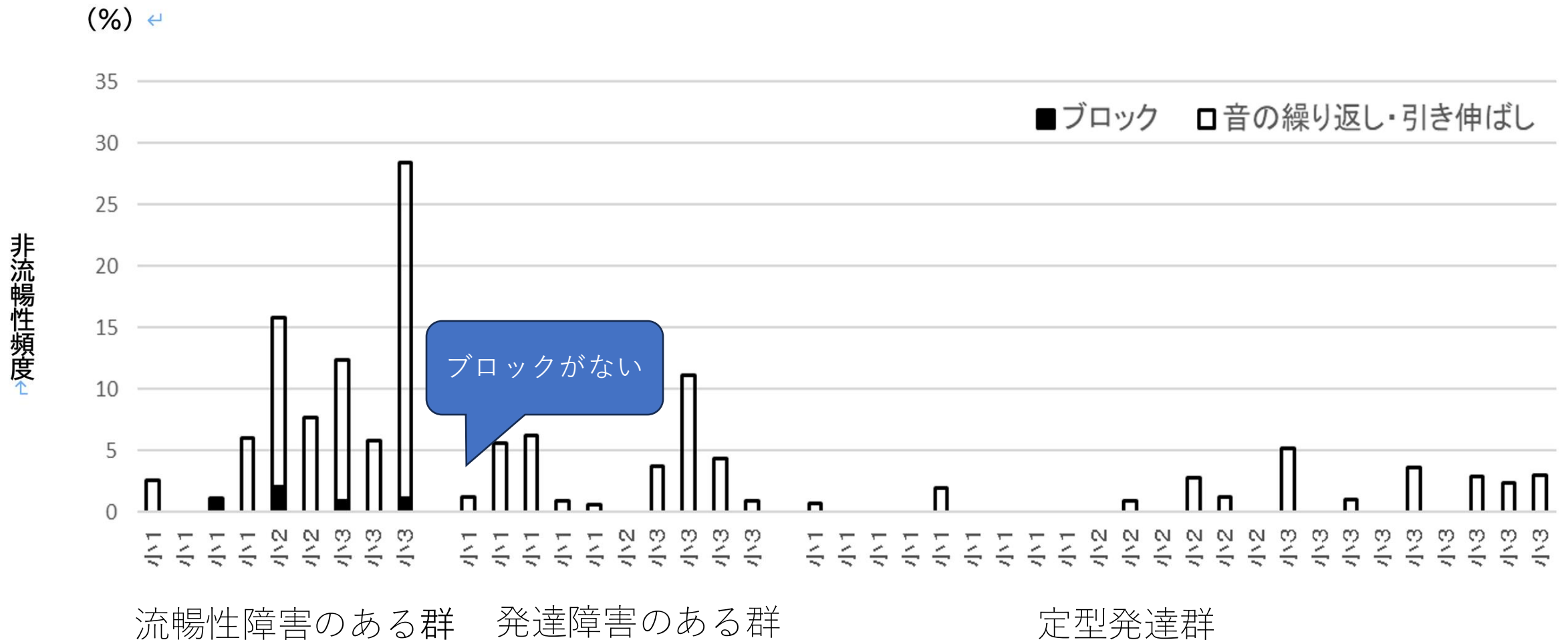


図2 流暢性障害のある群，発達障害のある群，定型発達群の
絵の説明課題における非流暢性頻度（吃音中核症状）（宮本，2018）

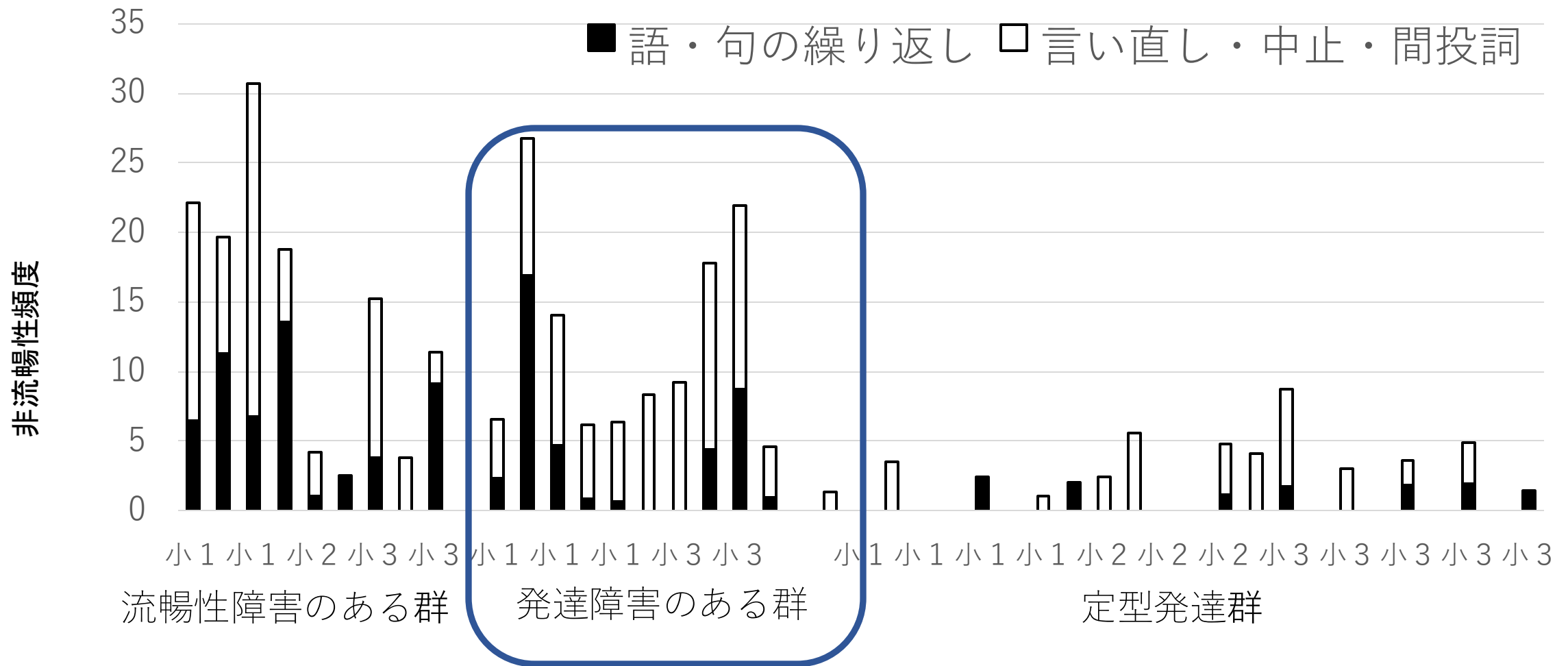


図3 流暢性障害のある群，発達障害のある群，定型発達群の
絵の説明課題における非流暢性頻度（その他の非流暢性）（宮本，2018）

- 緊張性のない繰り返し、言い直し・中止・間投詞などの「その他の非流暢性」は、**発達障害**のある者にも生起しやすい
- さらに、**早口言語症（クラタリング）**の可能性もある

早口言語症のLCDモデル

(St. Louis & Shulte, 2011)

クラタリングは、一般的な発話速度より速すぎる速さで話されたり、あるいは不規則な速度で話されている、流暢性の障害である。



これに加えて、以下の
症状がみられる

1. 過剰な正常範囲非流暢性
2. 過剰な音節の崩壊，あるいは省略
3. 異常なポーズ（話の間），音節の強勢，あるいは発話リズム

1. 過剰な正常範囲非流暢性

吃音中核症状

S R	音・モーラ・音節の繰り返し
P W R	語の部分の繰り返し
P r	引き伸ばし
B l	阻止（ブロック）

非中核症状（その他の非流暢性）

W R	語句の繰り返し
l j	挿入
l c ・ R v	中止・言い直し
B r	途切れ
P a	間

正常範囲非流暢性

吃音検査法第2版
（小澤ら, 2016）
を改変

正常範囲非流暢性
（van Zaalen et al., 2014）

緊張性のない

- ・ 語の繰り返し
- ・ 語の一部の繰り返し
- ・ 間投詞
- ・ 言い直し
- ・ 句の繰り返し
- ・ 語の一部の繰り返し

2. 過剰な音節の崩壊, あるいは省略

音節の崩壊, 省略は「多音節からなる語」で起きやすく、「折りたたみ」ともいわれる

- 語での例：
「おこのみやき」→「おこのやき」
- 文での例：
とっても楽しかった→とったの

※しかし, 音節の崩壊, 省略は上記のように文字として表記できない場合が多い

「折りたたみ」という症状の例

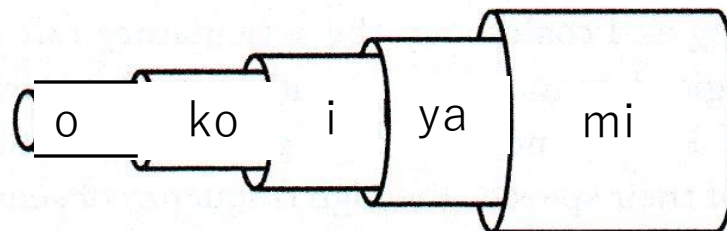
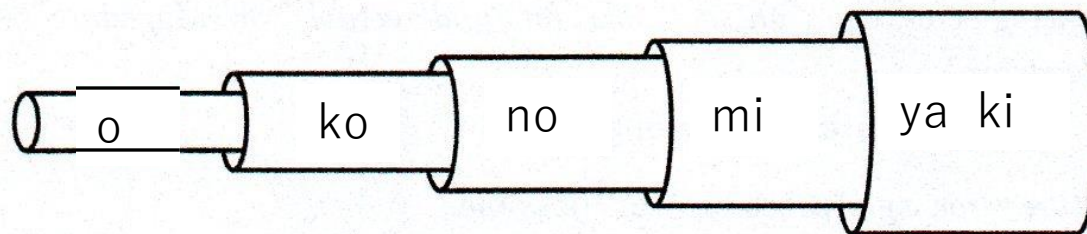


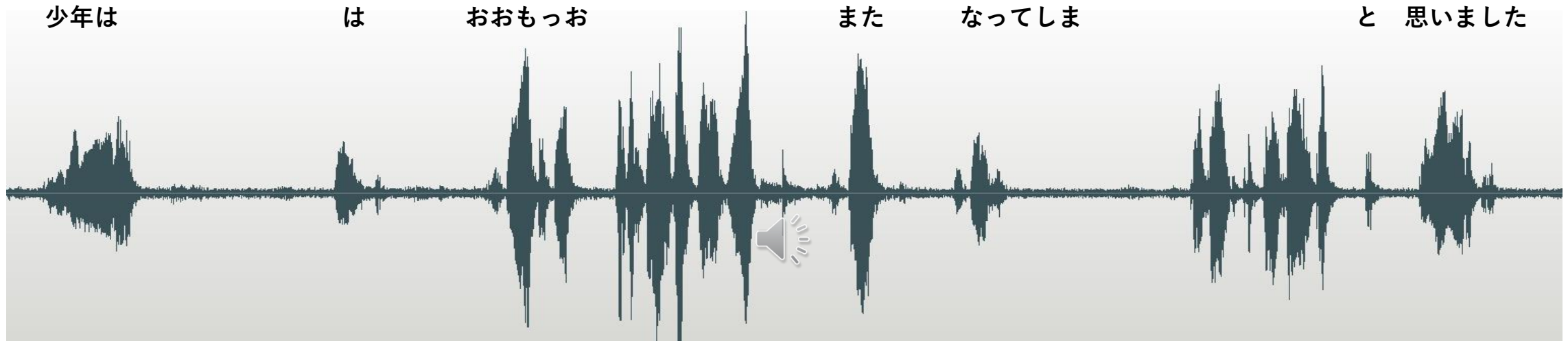
Figure 1.2: Example of Coalescence (see Dinger, Smit and Winkelman, 2008)

3. 異常なポーズ（話の間），音節の強勢， あるいは発話リズム

一般の人が行う，意味上，適切な文節などの区切りでのポーズが行われない場合が多い

- 息が続く限り話し続け，息継ぎのタイミングが，意味上の区切りではないことがある
- ポーズをあまりとらずに話し続ける傾向がある
- 抑揚のない話し方をする傾向がある→日本語ではあまり問題にならない可能性がある

クラタリング症状のある話し方の例



とっても楽しかったので

とったの とても楽しかった
(P) た

$$12\text{モーラ}/1.166\text{秒} = 10.3\text{モーラ}/\text{秒}$$

少年は、 とったの とても楽しかったと思いました。

ご清聴をありがとうございました。

主な参考文献：

森浩一・宮本昌子監訳（Van Zaalen, Y., & Reichel, I著）（2017）クラタリング: 早口言語症: 特徴・診断・治療の最新知見. 学苑社.

Miyamoto, S., Kobayashi, H., Sakai, N., Iimura, D., & Tsuge, M. (2022). Estimating the Prevalence of Specific Learning Disorder, Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder, and Autism Spectrum Disorder in Japanese School-Age Children Who Stutter. *Perspectives of the ASHA Special Interest Groups*, 7(3), 947-958.